

書評と紹介

藤本浄彦著

実存的宗教論の研究

平楽寺書店 昭和六一年三月刊
A 5 版 四三六頁 六五〇〇円

河波 昌

現在における東西の宗教の全面的な出会い、更にはその両者の交渉、融合等の出来事は、トインビーの指摘等を俟つまでもなく、人類の宗教文化史の上から云っても最大の出来事といえよう。二十世紀の後半から二十一世紀にかけての最大の事件は、単なる政治や経済等の次元上の諸問題をも遙かに超えて、このような宗教的な、精神的な出来事が、最大の関心事となりつつある点にあるのである。そしてキリスト者であれ、仏教者であれ、真摯に生きるそれら宗教者の心的地平もまた、単に各々みずからの宗教の識域のうちにとどまりつつも、他方、必然的に異宗教への開かれた地平のうちにみずから置くようにもなりつつあるのである。キリスト者が、不可避免的に浄土教的な信に関心を抱き（たとえばK・バルトが親鸞教学に対し、*der japanische Protestantismus* と呼称し）また日本における禅の学徒たちがマイスター・エックハルトの宗教体験に言及す

る等々の事例も、巨大な人類の宗教文化の必然的な趨勢ともいえるものである。そうした大いなる精神の流れの中から、おのずと生まれ出た宗教的思索の一つの結実が、藤本浄彦氏の『実存的宗教論の研究』ともいえよう。

ところで「実存的」という名が冒頭に冠せられているように、この著書は、西洋近代における実存主義の先駆者たるS・キェルケゴール、そしてその系譜下にあるP・テイリツヒと、主として法然の浄土教の研究、およびそれら両者を相互に媒介せしめつつ、藤本氏自身の実存的な宗教的思索の展開を試みるところに、その主たる内容があるのである。

浄土教的な精神的基盤の中から、みずからの精神的な自己形成を遂行しつつ、また他方、学問の対象を専ら西欧近代の宗教思想、とりわけキェルケゴールの実存的思惟にみずから自身をおくことにより、単に東西の宗教思想を客観的に比較研究するというのではなく、どこまでも両者が実存的、主体的に相互媒介せられつつ、藤本氏自身の宗教的思惟として展開せられているところに、本書の特色があるのである。

四百頁以上にも及ぶ大著ともいえるこの書は、昭和四四年から五九年までの約十五年間にわたって発表された十七篇からなる論文の集大成である。個々の論文の集積ゆえに、一見、それらが独立しているように見えながら、しかもその全体を見渡す時、またそこに氏の思索の必然的な展開をも見るのである。その全体の構成は全四部（各部分は、三章から六章をもって独立しており、その各章がそれぞれ独立した論文である）と、英文

概要、索引等から成っている。その全容を知るために、目次に従って各部の題目を見ると、次の通りである。

第一部 キェルケゴールにおける実存と信仰

第二部 テイリッヒにおける学問と信仰

第三部 法然における宗教的実存の問題

第四部 時と歴史―哲学・宗教・文化の重層として―

本稿では、その制約上、全内容にわたる詳述は不可能であるが、東西宗教の出会いという状況下におけるその一環として本書を見る時、そこに幾つかの興味深い内容の展開も見られるのである。具体的にそれは、近代西欧における宗教的思惟を通じて法然浄土教を見る時、単にそれまでの浄土教的な伝統的な思惟の領域には見えなかった人間的思惟にとって本質的な契機が露わになってくる、という点である。また逆に、かかる浄土教的思惟を媒介として西洋的な宗教的思惟もまた、新たな展望と未開の分野を示すということもありうるであろう。そして更にはそれら両者の新たな展開を通して、両者に共通の、普遍的な精神の根源的な領域への展望が開かれてくる、という予見も可能なのである。以上の観点から、本書中二、三の課題を取り上げてみよう。

まず関心をひくのは、「選択」の思想をめぐってである。第一部第四章の題は、「選択思想の一考察―法然とキェルケゴール」であり、ここでは法然浄土教の根本思想たる選択の思想

が、キェルケゴールの信仰の立場と対比して論じられている。ここでも伝統的な浄土教の立場が改めて近代西欧的思惟の地平で論究されるのであるが、そこで法然浄土教は異質の新しい光を照射されて、新しい相貌を示し、法然の思想がかえってわれわれ近代人にとって身近なものとして受け容れられるようになる。氏は、「法然とキェルケゴールにおける「選択」の思想は、……その淵源はいわゆる論理的ではなく、罪悪生死なる実存の原事実にあるということ。それゆえに、「単独者」として神「仏」に対峙する信仰的力動を含んでいる。そしてまた「選択」の本源が極めて脱自的超越性においてとらえられるということ。それゆえに、選択の構造は……弁証法的な露開性である。そこに、信仰の場にしか生じない論理を見ることができ。以上のような論点においても、両者は相互に透入しあえる資質を含んでいると言えよう。」(本書九五頁)とその内容を論じている。その背景には、キェルケゴールの単独者の概念、宗教性A、B等をめぐる論述を通しての法然の信仰との対比がなされているのであり、そこに近代人としてのわれわれが法然にアプローチしてゆく場合の極めて有効な手がかりともいえるべき契機をも見うるのである。このような視点は、時機相応を最重要視する法然自身の立場からいっても、ふさわしいものと云えよう。しかしながらそのことは、法然の思想をキェルケゴールの立場に還元することを意味するものではない。むしろキェルケゴールが不可避の媒介となつて、かえって法然自身の信仰の立場の理解の限りなき深まりを縁成せしめる契機として、それ

は極めて重要な意義をもつのである。そのことはまた、キェルケゴールの側についても考えられるべきことなのであり、むしろ両者の相互媒介を通じて、両者それぞれの立場の理解の限りなき深化が予想されうるのである。

次に洋の東西を問わず、宗教の問題は必然的に、「時間と永遠」の問題と不可分に関わっている。キェルケゴールにおいても「瞬時」Augenblick の概念においてこの問題は展開されている。藤本氏はとりわけ第四部、第三章の「瞬時」と「熟時」のテーマで、キェルケゴールの「瞬時」と共に、とくにティリッヒの熟時(カイロス)論に関心を集中している。たとえば本書三三八頁では、ティリッヒ自身のカイロス論をも引用し、「時間の経過における際立った時(間)、永遠が時間的なものを揺り動かし変容せしめつつも、人間実存の最奥底の土壌において危機をもたらしながら、その時間的なものに侵入する時(間)」であり、また「永遠的なものが現世的なものに突発し、現世的なものを受け入れるために用意せられている時(間)」であると言われる。時において緊張に満ちた垂直の深みこそが、「熟時の△カイロス√なのである。」と述べ、キリスト教的な精神圏内での時と永遠の問題を論じている。この問題は氏自身の立場においても不可避的な問題となるものであり、続く次章(第四章「一向専修と只管打座」)でみずからの問題として論究している。たとえば「只一向に専ら念仏を修するということとは、常に現在、この今という時の充実である。自己存在のすべてが……念仏行における時の充実を見る。……「一向専修」

の強調の内には、阿弥陀仏の永遠の願い(本願)と、行じる主体との間にかもし出される宗教的出合いの脈動そのものの「時」がある。それは、阿弥陀仏の永遠の願い(本願)が念仏を通して念仏する主体の内に突発する「満たされた時」の現成、すなわち、救いであるということになる」(三四八頁)と述べ、ティリッヒ等を媒介しながら浄土教的立場における時間論の展開を試みている。そこには固定化された宗教的な教条主義の枠組を超えた柔軟な宗教的思惟の展開が見られる。なお、評者の観点からすれば、この問題に関しては、華嚴における「念劫融即」の論理や『無量寿経』序における釈尊の宗教体験の内容としての「去来現の仏、仏々相念す」のごとき世界もまた見逃すことのできないテーマであるが、いずれにせよ、東西両宗教の出合いを通して、今後、限りなく豊かな「時と永遠」をめぐる思想の展開が期待されるのである。

全般的に云って、氏の思想的展開には、西洋的な実存主義やキリスト教神学等を媒介としつつ、大乘仏教、とりわけ法然浄土教へと帰趣してゆく動向が考えられる。しかしながら媒介となるこれら西洋的思惟が、浄土教的思惟の展開の単なる手段としての意義しかもちえないものではないであろう。それらはそれらでまた已々円成なのである。むしろ大乘仏教とキリスト教的思惟、あるいは西洋的思惟は、相互に媒介せられつつ、より開かれた新しい宗教的な精神圏の展望が望まれるのである。今後、キリスト教が東洋的になることにおいて、従来西欧的であることよってかえって隠されていたキリスト教の本来性の開

示ということも考えられるのであり、また「西欧的な大乘仏教」への展望も考えられるのである。真の絶対者（神）から見れば、東西をも超越して、東西のそれぞれの宗教が「己々円成」のものとして、新しい光芒を放ち、より本来的な意義が自覚せられるようになる。

氏は、本書の「後記」の中で、「本書の次の課題となるのは、法然浄土教をめぐる諸問題の考察であり、その後で、法然浄土教そのものの特色の学的解明という作業へと続くであろう。」と述べている。氏の最初の学問研究の因縁が西洋近世哲学であり、またキリスト教神学であったということが、世界宗教史的な展望の中で氏の浄土教的思想の展開に限りない期待と夢を抱かせるのである。

なお、巻末の英文目次、概要は、海外の日本浄土教研究等にとっても、何よりもの便宜となるであろう。著者の配慮を高く評価したい。

上智大学中世思想研究所編

キリスト教的プラトン主義

(中世研究 第2号)

創文社刊 一九八五年 四三〇〇円

小山宙丸

本書は雑誌の形で出された第一号(「中世研究」創刊号 聖ベネディクトゥスとその修道院文化 上智大学中世思想研究所 一九八二)に続くものとして、いっそう充実した新たな装いで出版されたものである。

本書の構成はつぎのようになっている。序言、一 オリゲネスにおけるプラトン主義(P・ネメシエギ)、二 選択と自己——ニュッサのグレゴリオスにおける「プロアイレシス」と「アレーテ」——(谷隆一郎)、三 アウグスティヌスのイデア論(F・ペレス)、四 神名としての最高類概念——偽ディオニュシオス・アレオペギテリスにおけるプラトン主義の一考察——(熊田陽一郎)、五 スコトウス・エリウゲナの認識論における新プラトン主義的性格(R・L・シロニス)、六 コンシュのギヨームの『ティマイオス』注釈(大谷啓治)、七 ボナヴェントウラにおけるプラトン主義(坂口ふみ)、八 トマス・アクイナスにおける分有(K・リーゼンフーバー)、九 形而上学的神秘家たるエックハルト——どこまで新プラトン主義者か——(門脇佳吉)、十 クザーヌスにおける神理解と世界の構造(山下一道)、文献表(外国語文献・邦語文献)、索引。

プラトン主義の三つの潮流として、R・クリバンスキーはビザンティン的伝統、アラブ・ユダヤ的伝統、ラテン中世的伝統をあげ、その概略を叙述した。この分類にしたがうと、本書のあつかうプラトン主義は、主として第三のラテン中世的伝統に属するといえるが、本書では、オリゲネス、ニュッサのグレゴリオス、アレオパギテースのように、ギリシア教父、古代末期の哲学者たちもとりあげられる。それゆえ、『キリスト教的プラトン主義』となるのであろう。

しかし、一口に「キリスト教的プラトン主義」と言っても、その源泉となったプラトン主義自体がすでに多様化しており、またそれをうけいれる側の対応の仕方もさまざまである。さらに時代的にも、二世紀後半のオリゲネスから、一五世紀後半のクザヌスまで約千三百年にわたる。時間はこの時代にあつては近現代にくらべれば、はるかにゆっくりと流れたとしても、歴史のひだの複雑さは、単純なとり扱いを拒否している。この時代にヨーロッパ思想の背骨が形成されたのであつて、しかもここにとりあげられた思想家たちはそれぞれの時代を代表する重要な人々である。ヨーロッパ思想の最深度を形づくこれらの思想家を解明しようとする試みは研究者にとって渴望のものである。と同時にこれらの思想家をまとめて一書をなそうという監修者の力量と理解の深さを考えざるをえない。ヨーロッパ思想の真闇部に大いなる光を投げられた各論文の執筆者に敬意を表するとともに、評者に全部を扱う力が全く欠けていることをあらかじめお詫びして、及ぶ限りの紹介を行うものである。

第一のネメシエギ氏の論文は、オリゲネスにおける神と人間と両者の関係に問題をしばり、かれのキリスト教的プラトン主義を明らかにする。さて中期プラトン主義においては、神は万物を超越し、しかも「善良さ」をもつものである。したがって世を愛する神でもある。オリゲネスの神概念はこのような影響を受けながら、それを突破し、乗りこえる。かれにとって神は人格的存在で「善良な者」であり、人々を愛し、その救いを望む者である。ここにオリゲネスの神概念の中心があり、ギリシア哲学の神と聖書の神の一つの総合がある。この神が「神の子ら」＝神の似像としての人間の魂、を創った。しかし、魂は自由意念の選択により墮落する。そこで神は魂を教育する場として物質界（宇宙）を創る。この教育施設の中で自由意志をもつて倫理的に行為する者が教育される。この自由意志という考え方は、ギリシア思想には見られないものである。このようにして神の教育、つまり救いの業を通して、人間は真の神の似像となるのである。

第二の谷氏の論文は、ニュッサのグレゴリオスの『モーセの生涯』第二部を解釈することによって、「プロアイレンス」(選択ないし自由意志)の意味を探り、「アレテー」の成立を明らかにする。グレゴリオスの「我々は固有のプロアイレンスに抛り、自己が意志する方へ自己形成してゆく」という言葉には、存在と生成に関わる「何らか硬質の論理」(λόγος) (三四頁)が宿されている。光と闇における神の顕現(存在の開示)は、それを見るモーセに絶えざる生成、「より大なる者に成りゆく

自己超越という事態」（四七頁）を引き起こす。この比較級を含む動的構造の内には、「信」に基づく超越的善との関わりが存在する。そしてプロアレキシスにより善を志向する場合、善を志向するそのことが魂に刻印されるという受動的再帰的構造が明らかとなる。グレゴリオスにとり、モーセの生とは、このような「アレテーの成立」の普遍的な形であった。

第三のベレス氏の論文は、十六世紀のストアレス、アウグスティヌス以前のフィロン、セネカについてふれ、歴史的な背景を探ってから、アウグスティヌスのイデア論を明らかにする。アウグスティヌスの『八三の諸問題』の中の「イデアについて」は、イデア (rationes) を神の思惟に内在する万物の超越的範型とする点で、決定的重要性をもっている。また、かれがイデア論についてのべている箇所は、『神の国』『創世記逐字解』『再考録』にもある。それらは、根本的な点で主旨は変わらないが、いくらかの発展がみられる。とくに、『神の国』第一巻一〇章では、神の単純性と知恵の内容との関連で rationes が問題とされる。十三世紀にイデアの複雑性をめぐって議論が行なわれたことを考えるとき、この指摘は重要であろう。最後に、アウグスティヌスの考えが、のちに「神学用語としてのイデア」の定着化に大きな貢献をはたしたことがのべられる。

第四の熊田氏の論文は、偽ディオニュシオス・アレオパギタースの『神名論』第九章にあらわれる対概念をなす神名、大・小・同・異・類似・非類似、静・動を検討する。これらの対概念は、プラトンの『パルメニデス』『ソピステス』では最高類

とされ、新プラトン主義では、一者につづくヌースに位置づけられていた。これに対し、アタナシオスの三位一体論の立場に立つディオニュシオスは、一方でこれらを「全体としての神」に適用し、新プラトン主義的段階下降の形を消去するが、他方、これらが下降のモテイーヴの中ではたした機能は保持するという「独自の道」を歩む。またこれらの名が神の名が神全体に適用された結果、神と世界の関係は直接的になる。神は世界を超越するとともに世界に内在する。「大なる神」は、「小なる神」でもある。このパラドクシカルな事態をディオニュシオスは *deaplya* と呼ぶ。そしてこの背後には、ディオニュシオス自身の体験が潜んでいることが指摘される。なお西欧神学が「大なる神」のみを指向し、そこに「ある宿命的偏向」を感じるといふ注¹⁴の指摘は興味深い。

第五のシロニス氏の論文は、スコトゥス・エリウゲナを認識論を通して、その「キリスト教化された新プラトン主義」（一〇九頁）を明らかにする。エリウゲナは、魂の働きを三段階に分ける。直観的働きをする悟性、概念を用いて推論の働きをする理性、そして内的感覚である。これらは、かれの存在論と対応し、一から多へという下降過程と、多から一へという上昇過程をもっている。つぎに神についての知と無知、すなわち、肯定神学と否定神学の問題が論じられる。肯定神学の認識論的根拠は理性にあり、否定神学のそれは悟性にある。したがって、エリウゲナはディオニュシオスにならない、肯定神学よりも否定神学に優位をおく。「神についての無知は真の英知である」（一

二三頁)。しかし、かれの否定神学は全くの不可知論ではなく、他の教父たちと同じく、創造を通した神の何らかの顕現と調和するものである。最後に、こうした主知主義的認識論の内には、アリストテレス的要素が含まれており、アリストテレス的認識論の内に新プラトン主義的要素を含むトマスとは対照的であるという指摘がなされる。

第六の大谷氏の論文は、十二世紀のシャルトル学派に属するコンシェのギヨームの『ティマイオス』注釈を通し、当時行なわれた「かなり強引なプラトンのキリスト教的解釈」(一三八頁)の一端を明らかにする。例えば、『ティマイオス』27Eの宇宙モデルの記述は、ギヨームの注釈では、創造主なる神の宇宙創造の記述と解釈される。また、28A〜30Cの宇宙の製作者は、創造主とされ、無からの創造が語られる。37D以下の宇宙のはじまり、永遠の問題については、アウグスティヌス、ボエティウスの考えがよみこまれている。したがって、ギヨームにとり、プラトン哲学にはキリスト教に反する教えがほとんど見い出されない。たとえ、そういう場合であっても、それはプラトンが *Integumentum* (覆い・神話) によって一層深い哲学を語っていると、かれは考えた。なお、本論文には、ギヨームの注釈が豊富に引用されているので、当時広く行なわれた *accessus, glossae* を知るためにも有益であろう。

第七の坂口氏の論文は、ボナヴェントゥラのプラトン評価の移行を論じる。前著著作の『命題集注釈』において、プラトンはアリストテレスに凌駕された哲学者と見なされていた。

中期の『万人の唯一の教師たるキリスト』において、両者に対する中庸で均整のとれた評価がなされる。そして、後期の『六日間の業についての講義』では、前期の評価が逆転する。この背後には、パリ大学人文学部における急進的アリストテレス主義の問題がある。この問題の中で、ボウヴェントゥラは、アリストテレス的な経験に立脚した知のあり方に危機感を抱く。そして、かれの思想に本来的であった直観知・範型論が前面に出てくる。こうして、プラトンのイデア論へと傾斜する。イデア＝範型、それは「中」(*medium*)、キリストに他ならない。かれは認識の確実性をキリストに求める。かれのこうした思想を支えるのは、キリスト体験＝フランチェスコ体験であった。なお、本論文でテキストが、ボナヴェントゥラが明白にプラトン、プラトニキと名指した場所に限定されているが、『命題集注釈』I, d. 35, 『キリストの知についての問題集』などにおけるイデア論の検討というあえて望蜀を記さして頂きたい。

第八のリーゼンフーバー氏の論文は、これまでの研究史を十分に踏まえた上で、分有概念を中心として(新)プラトン主義的な主題の幾つかを吟味するものである。トマスにおいて分有が様々な場面で用いられるのは、それが「構造的概念」として理解されているからである。すなわち、自存する純粹完全性としての神と、限定的完全性を有する世界との存在論的關係によって樹立される構造である。ところで、分有という、当然イデアとの関連が問題となる。これについて、トマスはイデアの多数性をキリスト教信仰の立場から批判する一方、分有を唯一

の始源的原理・善との関連で考える。こうして分有の原理としての神が問題となり、神の名（善・一・存在・真）とそれらに対応する原因性（目的因性、範型因性、作用因性・一と目的における共同性）が論じられる。そして最後に分有の多様でかつ一なる本質が明らかにされ、分有が構造概念であることが確認される。

第九の門脇氏の論文は、エックハルトの思惟方法の特徴（形相的流出、重複的思惟方法など）がすぐれて新プラトン主義的でありながら、その直観内容という点では、「純粹なキリスト教的神秘家」であることを明らかにする。ではエックハルトの神秘的直観と、新プラトン主義的直観とは何が決定的に異なるのであろうか。かれにとつて神秘的直観とは、「全被造物の範型である御言葉と一つになること」（二四九頁）である。ここにおいてイエス・キリストの仲介とキリストを観想することが決定的となるのである。そしてこのためには、観想する側の徹底的離脱が説かれるのである。ところで、本論文においてとり扱われるテキストは、従来行なわれてきた研究のようにドイツ語説教ではなく、ラテン語著作『ヨハネ福音書註解』である。後者から獲得される洞察が、のちに前者で展開される思想を根本的に含んでいるという指摘（二五〇頁）は、エックハルト研究において重要な意味をもつといえよう。

第十の山下氏の論文は、標題にあるように、二つの部分に分れ、はじめのクザイヌスの神認識の項においてプラトニズムの伝統を明らかにし、第二の世界の構造を探るところでは、クザ

イヌスの近代性を解明しようとしている。まず第一部ではクザイヌスの特有の諸概念「知ある無知」、「対立物の一致」、「非他」、などを分析しつつ、彼の神理解とは、存在と認識の根源を対立以前の一性として見、一切の対立の以前への超越として生起することを明らかにする。しかしこの超越によって神が把握されるのではない。そうではなく神はわれわれの無知の闇の中に輝くことによつて、われわれは無限に神に近づくことができるのである。世界を考える第二部においても、クザイヌスの術語である「包含―展開」、「縮減」などを分析しつつ、世界における個物の存在は、もはや実体的なものとしてではなく、他の個物との連関のうちでその現実性を得る機能的なものとして存在するから関係性として規定されるとする。このような相対性の視点に、われわれはクザイヌスが近代を予示しているものを見ることができるのである。

宮本袈裟雄著

里修験の研究

吉川弘文館 昭和五九年十月二十日発行

第一版 三六八頁 定価六〇〇〇円

門 馬 幸 夫

民俗学は一種のブームの観を呈しているようである。むしろそれは、当の民俗学以上に人類学や社会学、歴史学、特に中

世史学などの隣接科学が民俗学に近接した成果を挙げてきている事にも一因があるろう。しかしこの事は逆に、民俗学自体の脆弱化を招く危険性をも有している。民俗学が、その持つ実証力以上に用いられ、妖怪の民俗学などに見られるように、民俗世界に対する、恣意的な想像力のみを飛翔させる危険性があるからである。

『里修験の研究』は、こうした傾向のものとは異なり、長期のフィールドワークに基づく着実な方法と視点、分析が提示されているものである。本書は、従来、山岳信仰研究の分野で欠如していた、近世修験の地域における活動や実際の機能を、近世文書等による豊富な文献を援用し、また民俗事例に基づいて実証的・体系的に報告している。評者自身は宗教社会学を専攻する者であり、民俗事象はそれ自体、思想や行為、イデオロギーや規範、象徴を含むもの、すなわち文化・歴史として、一つの存在論的位相を為すものとして理解をしている者であるが、この立場からしても本書はこうした見方に対する大なる示唆を与えるものとなっている。修験をめぐる地域や集団の行為・規制、治病や飯綱信仰による象徴儀礼などを、特に近世以降に止目し民俗信仰と、それを担う在り方・人間の相互作用を、地域・歴史状況的に浮かびあがらせている。こうした記述の方法は、単なる歴史民俗学というより、むしろ歴史人類学ないし社会史的な民俗学の可能性をも示唆していよう。その意味で本書は、民俗学における近年の学術的な成果の一つとして、また修験道研究史上に新たなページを加えたものとして高く評価さ

れて然るべきものであろう。さて本書の構成は次のようになっている。

序 論 課題と方法

第一部 里修験の展開

第一章 修験道の里修験化と存在形態

第二章 下北半島の里修験

第三章 日光山「里山伏」

第四章 佐渡の里修験とその展開——神仏分離前後を中心として——

第五章 平戸諸島の里修験

第二部 修験道と民間信仰

第一章 修験道の治癒儀礼と民間療法

第二章 飯綱信仰の展開

第三章 関東の出羽三山講——千葉県の三山登拝習俗を中心として——

第四章 加波山信仰の展開と山先達——地方霊山信仰の一

例として——

結 論 まとめと今後の課題

これに補論として「修験道と神仙思想」「山岳修行者覚書」の論考が付随している。

序論の「課題と方法」のところで、修験道とは山岳での修行・苦行を通して得た超自然的・霊的能力をもとに、民衆のあらゆる要求に答えてその解決をはかる宗教であると規定され、本書は民俗学的立場から、この修験道の一形態である里修験を主

要な分析対象とし、その存在形態や宗教活動および庶民との関わり方を明らかにするとともに、庶民信仰・民間信仰における修験の影響およびその中で果たしてきた役割などを論じようとするものである、という目的が述べられているが、この目的は本書の記述をみる限り概ね果たされていると言えよう。

「里修験」という、新しいタームを本書で用いたことについては、民俗学の立場からする現在の山岳信仰研究・修験道研究の要路は近世以降の修験の実質的動向を分析組上にするの必要があり、しかもそれは「山（岳）」もさることながら「里」、すなわち地域共同体における修験者等を中心とした信仰の機能・伝置づけを説明することにあるという視角から名付けられたタームのようなものである。そのため著者は、「山岳」——山岳は修行道場であり、聖なる力を獲得する場——と「里」——山で獲得した力を駆使する場——、および修験の性格と関連する「移動性」と「定着性」という二つの規準を用いて修験の類型を設定する。すなわちⅠ型 山籠・山岳抖擻型修験、Ⅱ型 廻国・聖型修験、Ⅲ型 御師型修験、Ⅳ型 里修験、の四類型である（図1参照）。

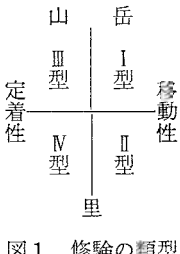


図1 修験の類型

地域共同体を中心として行われている。従ってその分析は、このような修験の里修験化過程と里修験の存在の全般的傾向およびそれと地域社会との関わりにその焦点がなければならないとする著者の意図は領けるところである。評者作成の図で言えばその焦点は、山（岳）から里へ（Ⅰ・Ⅲ型からⅡ・Ⅳ型へ）移動から定着へ（Ⅰ・Ⅱ型からⅢ・Ⅳ型へ）と重なる第4象限、すなわちⅣ型の里修験にそれがある。近世期以降、修験の在り様が里修験の形態となった事情については和歌森氏らの諸説もあるが、何より中世修験が所領その他の経済的諸権利を有する自足的権門体制でもあり、その故に山岳修験者が宗教的専門家として君臨する事を可能にさせていたが、中世から近世期にかけての武士層の台頭はその基盤をつき崩し、修験道は近世期における解体再編を余儀なくされた結果ともみなし得よう。

さて本書の構成は、第一部の「修験道（者）」の果たす機能や位置づけについて論じられた部分、里修験の地方ごとの展開と、第二部の修験と民俗信仰との対比およびその相互作用を明らかにしようとした部分から成っている。第一章の「修験道の里修験化と存在形態」では関東地方の修験の在り方から修験の組織化を述べ、近世期における修験が本末的系列に整序化され、現世利益的、俗的権威の優越性という特徴を持つ事を述べる。第二章の「下北半島の里修験」では民俗宗教と修験（者）との関わり、第三章「日光山『里山伏』」は里山伏の宗教活動・師檀関係、第四章「佐渡の修験とその展開」では修験の活動が個人レベル（治病）、家レベル（祈願檀家）、村レベル（祈禱）にお

よび、また諸宗教との緊張関係、地域社会における他の宗教との機能的分業関係、とりわけ地域社会の在り方が修験の宗教的活動に影響を与える事などが示される。第五章「平戸諸島の里修験」では里修験であるヤンボン（山伏）の宗教活動が述べられている。

第二部第一章「修験道の治癒儀礼と民間療法」では修験の治癒儀礼と民俗信仰・民間医療との関わりを述べ、病氣・災難が超自然的靈力によって生じ、それを癒す治癒儀礼が修験儀礼の中核をなす事を述べている。第二章「飯綱信仰の展開」では修験と民俗宗教に焦点をあてながら、飯綱信仰の概観、飯綱信仰と憑霊信仰との関わり、飯綱信仰と稲荷信仰の変遷・習合・関わりを追究している。第三章「関東の出羽三山講」は千葉県の出羽三山登拝習俗の概観と歴史的变化・問題点を検討、第四章「加波山信仰の展開と山先達」では加波山信仰の今日的アスペクトと山先達についてその性格・担い手・登拝の意義などが述べられている。以上、ここでは便宜のためにごく荒くスケッチをしたに過ぎないので各章ごとの要約・問題点については本書の「結論 まとめと今後の課題」に述べられているので詳しくはそれを参照していただきたい。

本書について気付かされた点を一、二挙げてみよう。まず本書の構成の問題であるが、第二部の第三章「関東の出羽三山講」、第四章「加波山信仰の展開と山先達」などはむしろ第一部に入るような内容ではなかったかと思われる。また、章の中でも構成を一考したほうがすっきりと思われれるものもある。

る。例えば第二部第二章の「飯綱信仰の展開」は、ここでの章ごとのスケッチでも見たように複雑な内容が盛り込まれており、別に章を立てて論を展開した方がこの章を錯綜したものに感じさせないで済むのではないか。

次に、タイムないし概念の問題が挙げられよう。例えば、民間信仰、庶民信仰、民衆信仰、民俗信仰、民俗宗教など、類似の用語・概念が出てくる場合が多かったが、研究者が使用する「分析概念」用語は、隣接科学との関係からも、整序化して使用する必要があるのではないか。また、序論を除く文中で時にみられる「く型」という言い方についても、それがいわゆる「理念型」なのか、傾向を指しているのか、等に注意を払う必要があると思われる。

おしまいに、本書の「まとめと今後の課題」に要領よく今後の課題がまとめられているが、それ以外の今後の「課題」として、修験と既成仏教（寺院）・神社との関係、あるいは修験と天狗信仰との関係なども、もう少し明らかにしていただければと思われる。以上、この労多き著書をもした著者に敬意を表しつつ、欄筆することとする。

クザールヌス研究序説

国文社 昭和六十一年二月十五日刊

A五判 三二七頁 四三〇〇円

山 下 一 道

本書は、『日本クザールヌス学会（昭和五十七年十一月十九日設立）』から刊行された最初の研究成果である。「クザールヌスの生涯と思想およびクザールヌスの周辺に関わる啓蒙的で学術的に高度な論文集」という編集方針に従い、本書には先ず次の十一論文——一、青年時代のクザールヌス（酒井修）、二、クザールヌスの思考の成立とその方法（小山宙丸・酒井紀幸）、三、クザールヌスの推測の根本命題（大出哲）、四、クザールヌスと「無限」の問題（藪田坦）、五、『可能現実存在論』の構造（八巻和彦）、六、知られざる神を知る（クラウス・リーゼンフーバー）、七、クザールヌスとネオプラトニズム（野町啓）、八、宗教意識の展開に関する一考察（清水富雄）、九、教会改革者としてのクザールヌス（ペテロ・ネメシエギ）、十、『DE CONCORDANTIA CATHOLICA』と平和思想（坂本堯）、十一、クザールヌス、ローマ法、人文主義（渡辺守道）——が収められ、更にクザールヌス学会紹介、研究案内及び（主として邦人の）研究文献目録が付けられている。この書物を通じて、我々は多方面からなる総合的なク

ザールヌス理解の道と日本に於けるクザールヌス研究の現状を窺い知ることができるのである。

さて、これら十一の論文は内容的にみると（A）クザールヌスの生涯及び実践活動に関するもの（第一、九、十、十一論文）、（B）思想的立場からのクザールヌス研究（第七、八論文）、（C）クザールヌスの著作とその思想理解（第二、三、四、五、六論文）に区分される。以下、この順序で各論文の内容を要約紹介し、若干の問題点を指摘したい。

（A） 酒井論文ではクザールヌスの哲学的神学的思索と政治的社会的活動を根底的総合的に把握する前提としてパドアーケルン時代（1417～1432）の彼の生の理解が試みられ、以下のことが明らかにされる。（Ⅰ）パドアー留学中（1417～1423）教会法の研究、公会議主位論の伝統への接近、占星術への関心の萌芽と同時に、人文主義的気運の中で師友との交わりによる時代精神の最先端への接近、これらの土壌の上で、急速に崩壊し解体しつつあるヨーロッパ世界とベスト流行による実存的不安の救済の叫び声が解決さるべき課題として経験された。（Ⅱ）ケルン時代（1425～1432）、トリエール大司教の法律顧問官兼書記として実務処理に当たる一方、ケルン大学に教会法博士として登録し、何にもまして哲学的神学的関心が抬頭する。即ち、アルベルトゥス・マグヌス及び擬ディオニジウス書から「対立の一致」の概念の、ライモンド・ルルスから「和合」の概念の、そして数や図形の象徴による思想表現の手法の獲得を通じて彼の精神はキリスト教的プラトン主義の伝統へと帰趨してい

った。

ネメシエギ論文はクザーヌスの教会改革の思想とその実践の挫折の原因を追究している。筆者はクザーヌスの教会観と公会議至上主義を初期の著作『De concordantia catholica (普遍的調和)』における『調和』の思想から説明し、この思想の永久的価値を認めつつ、バーゼル公会議以降穩健な教皇至上主義者となった彼の枢機卿、ブリクセン領主教としての教会改革(1440-1450)の挫折の一端が福音の貧しさの欠如、即ち、教会法遵守の強制、破門言い渡し、世俗権力への依存等に起因すると見なす。そして、十六世紀のルターの宗教改革の成功と比較してクザーヌスの教会改革が人々に受け入れられなかった理由を、クザーヌスの思想の包括的な幅の広さとラテン語著作のためにその影響力が制限されたこと、神の非他者性の主張による神秘主義的傾向、従来の教会の制度と權威の承認のうえでの改革の遂行、世俗領主に対する教会の独立の主張、高位聖職者としての権力の座からの改革の呼び掛け、等によると結論している。

坂本論文は『De pace fidei』(1453)に現れた「対話と理解」にもとづくクザーヌスの平和思想の形成を「De concordantia catholica」(1433)と初期の説教集に求め、concordantiaの概念の解明を通じてその根本思想を次の四点に要約している。一、平和は神よりのものである。二、平和は concordia である。三、平和と concordantia は会議における consensus による。四、平和はキリスト教者と全人類の本質

である。即ち、最高の相等性によって一である無限の concordantia が三位一体としての神の本質をなし、創造によって生ずる有限な人間精神の諸能力の concordantia (内なる平和)と神との concordia が外なる平和を生ずる(一、二)。それ故、平和は神から来る concordantia が会議に参加する人々の consensus によって受け入れられることにより実現される(三)。そして、聖父と聖霊との最高の concordantia において永遠に生きる自己の生命の本質をキリストが十字架の救済の業によって人類に与えたが故に、平和はキリスト者と全人類の本質となる(四)。

渡辺論文では中世後期ドイツにおける法継受と人文主義の摂取に対するクザーヌスとハインブルクの関わりが考察される。先ず、ローマ法は一四五〇年以前はイタリアで法学を修めた聖職者を介して継受され、一四五〇年以降は法曹の「世俗化」に伴いドイツの大学でも教授され、イタリア、ドイツで教育を受けた学識法律家の抬頭と共に一般に継受されたこと、更に、これら留学生によるイタリア人文主義の伝播という歴史的事実が考察の前提として示される。そして、クザーヌス、ハインブルク共にパドヴァ大学で同類の法学教育を受け、かつ人文主義の影響の下で古典作家とその著作に精通したにも拘わらずドイツにおけるローマ法継受にも、ドイツ人文主義にも殆ど貢献しなかった理由として筆者は彼らの留学時期が一四五〇年以前であったこと、かれらの最大の関心事がそこには無かったことを挙げ、後に両者が宿敵関係になったのはヨーロッパ社会におけ

るローマ教会の地位についての彼らの見解の相異から理解されるところ。

(B) 野町論文は、クザリヌスとプラトニズムとの関わりがプロクロスを核とするネオプラトニズムを介してのものであることを文献学的に検証しようとする。筆者は、まずクザリヌス蒐集写本の検討からクザリヌスはプラトンの思想をラテン語訳の著作と註解を通じて受容したことを確認する。次に、J・コッホ、R・クリバンスキーの研究に従って、クザリヌスがギョーム訳のプロクロスの『パルメニデス註解』(クザリヌス写本186)を使用したこと、プロクロスの『プラトン神学』とプラトンの『パルメニデス』の二著をラテン語に翻訳させ前者はパブルス訳で「クザリヌス写本185」「ハーレイ写本328」として、後者はゲオルギオス訳で現存することを証示する。その上で、クザリヌスの否定神学の方法がプロクロスを介して観得されたこと、更に起源とそこから派生するもの(一と多)の根本的区別の強調にプロクロスの影響がみられることが「クザリヌス写本186」から示されることにより、クザリヌスのプラトニ理解がプロクロスに典型化されるネオプラトニズムの解釈を通じてのものであることが結論づけられる。又、「クザリヌス写本186」がギリシア語写本の再構成と校訂に、それ故、プロクロス研究に多大の意義をなすことが示される。

清水論文では「非連続性と連続性」という観点からライブニッツとクザリヌスに於ける宗教意識の関連の解明が試みられる。ライブニッツでは論理的前提と神学的前提が個体限定の基礎と

して置かれ、まず神と個体の非連続的―連続的(垂直)関係が、そして個体間の非連続的―連続的(水平)関係が展開される。そこから①不可視的な神の外側からの個体への働き掛けによる神―個体間の交わりの成立②各個体の個性性の先鋭化③身体的契機の重要性④罪の意識の深化として宗教意識の成立が説明される。クザリヌスにおける「非連続性―連続性」の二重構造は神の行方「縮限」(contactio)として説明され、可能性と現実性の神における在り方(一致)と被造物における在り方(不一致)の区別と、可能性の現実性への段階的進行から神と個体間及び個体相互間の「非連続性―連続性」が生ずる。そこから神学的前提と身体性の結合、神と自己の内面乃至生活感情との深い関わりが説明される。

(C) 小山・酒井論文では、『De docta ignorantia』に於けるクザリヌスの思考の根本性格が考察される。第一巻神論において、それは被造物による無限な接近によっては到達不可能な無限な真理の「自体性」とその到達不可能性を了解した上で更に無限へ至ろうとする志向性からなる「自体」への接近の過程、▲漸近線への思考▼として特徴づけられ、その具体的な事例があらゆる一性と他性との対立を越えた根源、絶対的一性(unitas absoluta)としての神と、図形を援用してのそれへ無限の漸近として示される。第二巻宇宙論においてこの漸近としての超越を可能にし方向づける根拠は、縮限(contratio)としての宇宙の在り方▲一(なる宇宙)と多(なる万物)の相互制約関係▼に求められ、▲相互的(ad indicem)思考▼、

即ち“Quodlibet in quodlibet”と表現される一なる全体集合とその各々の要素の制約関係として展開される。第三巻においてキリストにおける神と被造物の合一が万物の、人間本性の完成として、従って、信仰によるキリストとの合一という同一化的思考として展開され、△把握されないものを▽を△把握されない仕方▽で△把握する▽というクザヌスの思惟の根本性格が、それぞれ第一、二、三巻の思考構造への対応として説明される。

大出論文は、『推測論』De coniecturis 第一部における推測の基本命題を説明する。(一)クザヌスの「一性の形而上学」——「絶対的な一性」(Deus)と「縮限された一性」(intellectus, ratio, sensus)の間、並びに後者の三者間の一性・他性関係からなる統一的上昇・下降関係——の説明から我々の知解は可感的なものからはじまり「絶対的な一性」の他性である「縮限された一性」において可能であるが故に、「真なるもの」についての人間の積極的な主張はすべて推測であること、推測の根源が(人間的な仕方)で縮限された無限性である)人間の精神であることが明らかにされる。そして人間精神による「真なるもの」の探求は、創造に於ける神の中の原像的な比(proportio)と世界の中に穩れている比の間の類似の故に数学的な図形を用いて象徴的に最も確実に遂行される。従って、四の前進を基礎とする完全数の概念が導入され、一性と完全数の概念によって可能な総ての数を包含する数的秩序が構築される。この数の四的前進から精神の四つの段階——神(一)、知性実

体(10)、靈魂(100)、物体(1000)——が推測される。(二)一性と他性から成り立っている各々の数の持つ一性と他性の割合を示す「範型的図形P (figura paradigmatica)」が導き出され、普遍そのもの、あらゆる世界、およびそれらの内に存するものどもが相互に前進し合う一性と他性から構成されるという推測が相異なる仕方で生じる。(三)P図形から、一性自体は他性に於いて分有されて見いだされる事が洞察され、一性を中心にしたP図形の回転によって三つの同心円からなる宇宙の図形が得られる。そして、宇宙の各領域が固有の真理と認識様式を持ち、それぞれに推測と確実性の固有の様式が対応するという構造が、推測される。更に、宇宙の各領域の完全性のためにそれぞれに固有な完全数の数列の配置によって普遍の図形が導き出され、分有の思想が詳細に展開される。

藪田論文は、「無限」についてのクザヌスの思惟の展開において「数学的なもの」が(一)その方法的基礎をなし、その上で(二)世界の無限性の考察が可能になることを説明する。(一)「Docta ignorantia」——比較(comparatio)による我々の認識を通じては「無限」自体は認識不可能であるという知——において、「無限」の思惟は「数学的なもの」のもつ不可視なもの、Imago, Symbolumとしての機能を媒介にして、「有限形象から無限形象へ、無限形象から端的に無限なものへ」の二重の無限への転移(transumptio)として遂行される。それによって、(二)世界の無限性が有限な無限性(infinitas finita)として次の二つの観点から考察される。①端的に無限な

もの（神的無限）から——世界は一つの全体としてそれを限界づけるものなき（原理的）無限として把握されるが、同時に神の縮限による神の似姿（similitudo Dei）として自己の質量的限定を越えることが出来ない欠如的無限（privative infinitum）（事実的有限性）として神的無限から区別される。②有限な被造物の領域から——世界には常に「より大またはより小なもの」が見出されその無際限性と認識の無終性の故に世界の（原理的）無限性が語られるが、同時にその限界到達の不可能性の故に世界は（事実的）有限性の内に留どまるのである。クザーヌスに於いてはこの二つの観点が重なりあって世界の無限性を思惟する立場が形成されている。

八巻論文では『可能現実存在論（De possibili）』の構造説明が試みられる。まず、△存在可能であるとして現実に存在している▽のではない被造物の在り方から区別され、神は△現実に存在しているところのものども▽がそれによって現実に存在することが可能であるところの可能性であり、それ故、一切を包含する存在可能として現に存在している絶対的可能性として、△可能現実存在▽ possess と称される。次に、包含—展開としての神—世界関係（esse ante non-esse—esse post non-esse）が、〈non-esse〉の持つ意味（①一性としての神から他性（alteritas）としての不完全な被造物の創造という一性の存在否定、②被造物の非存在、未存在、③神に於ける被造物の在り方を把握する場合世界の側からの被造物の在り方の否定を意味し、〈non-esse〉は中間的な△もの▽ではなく神—世

界関係の△接点▽の表現である）から解明される。そこから、被造物の神への超越は、〈non-esse〉を内在する被造物が〈non-esse〉を越えて行く事として、△ほんやりした映像〈aenigma という△しるし▽を媒介にして、神が観ることによって可能となる見神（Visio dei）として説明される。

リーゼンフーバー論文は、『隠された神についての対話』の解釈を通じて、神認識の問題を人間精神の自己認識の在り方として解明する。我々の認識は、物の何性（quidditas）というア・プリオリな先理解に導かれ悟性を媒介にして精神が主観として、感覚に与えられるものを客体化し区別することによって成立する。その限り、物の何性として現れる真理自体は知の地平として決して客体化されず認識されえない。それ故、我々の認識の持つこの本質的無知の自覚（知ある無知）において、認識の超越論的根拠としての真理の絶対の先行性と規範性を承認し、真理との根本関係のうちで自己を相対化しそれへと全力で自己を開くという仕方根源へと遡源する運動、即ち、「祈り」という宗教的行為として神認識が始まる。精神の自己認識としての神認識とは、対象的内容的な神規定の否定、更に陳述不可能という反省的否定的な仕方での神規定の否定を通じて悟性の思惟形式を無化し、対立以前の領域へと精神が直接に調べられることによって初めて可能となり、比喻を介して私を見ることによってその都度私の認識を可能にするそれ自体不可知な神のまなざしを自らの認識に於いて内的に知覚することとして遂行される。

以上が各論文の要約紹介である。評者の読解力不足のため十分な要約、誤った理解がなされている場合は、各論文の著者のご寛容とご指摘をお願いする次第である。

さて、これらの全論文について論評することは評者の能力を遥かに越えたことであり、又、許された紙幅を既に越えているので(C)の論文に限定して若干述べさせて頂きたい。“*doctrina ignorantia*”, “*coincidentia oppositorum*”, “*contractio*”等の語が示すように、クザヌス哲学では神認識とそれにもとづく世界(宇宙)理解が中心課題となる。まず、リーゼンフーバー論文は肯定神学と否定神学の方法の限界を綿密に論証し、比喩による神理解の妥当性、超越の方向とその在り方を明確に示ることによって「知ある無知」における神認識の構造を説明した優れた論文である。次に、「*complicatio-explicatio*」と表現されるクザヌスの神—世界関係を理解する鍵は「縮限(*Contractio*)」の概念であるが、この「包含—展開」、「一性—他性」の内的運動とその展開の具体的な相は大出論文の原典に即した精密な研究によつて的確に究明されている。さて、「縮限」の概念そのものはクザヌスの思惟の根本性格を追求した意欲的で洞察に富んだ小山・酒井論文において、この世界の被造物を特徴づける在り方として宇宙の一と万物の多(集合の全体的一と要素の多)との相互制約関係として理解されているが、評者にはこの関係は次の点において更に究明されねばならないと思われる。まず、相互制約関係によって成立する宇宙の一は、この関係を通じて万物がそれぞれの相異性において自己

同一性を保持し、その相異性のままに包含される全体的一としての自己同一性 (*identitas universi est in diversitate*) であり、万物をその相異性において成立せしめ根拠づけることを通じて保持される自己同一性として存在論的に一切の個物に先行し、同時に存在的には各々の個物においてその相異性のうちに現れるということ。宇宙の一と万物の多の相互制約関係におけるこの存在論的差異を指摘することによって神と万物の多を媒介する宇宙の在り方が解明されるのである。次に、「偶然性 (*contingentia*)」——被造物はその制約関係を、神からではなくそれ自体の本来的な在り方としてそれぞれに偶然的に得ているということ(四十八頁)——の概念も絶対の相等性に於ける神の存在分与の端的に有限な受け入れ即被造物の存在の成立、即ち、神の絶対の一が自己以外の他の一切の物との対立関係のうち受け入れられ存在へと至るという被造物の有限な在り方に必然的に伴う事態として理解されねばならない。この二点の究明から我々は、「縮限」の概念をより精確に把握できると思われる。そして、それによって我々は、「世界の外からと、世界の内から」という二重の視点が含まれ、しかもそれらが重なり合つて世界の無限性を思惟する立場が形成されている(一二—一五頁)という藺田論文の結論を更に存在論的側面から、即ち、神の無限の一性の他性として世界はどこまでも神の内になり、同時に世界の一性は各々の個物においてその相異性の内に現れるという二重の視点の重なり合いとしての世界の在り方から照射できると思われる。

ともあれ、このような優れた業績の出現を喜ぶとともに第二、第三の論文集の一日も早い出版を期待したいと思う。